東南アジア研究　40巻2号　2002年9月

現地通信

東ティモールに日は昇ったか？

青　山　　亨*

世界で一番新しい国，21世紀最初の独立国，東ティモールが5月20日に誕生した。東南アジアの新しい仲間である。一時は夢想にすぎないかとさえ思われた目標を粘り強く達成したことをひとまず祝福したい。

ティモールの名は中国人によって13世紀前半の『諸蕃志』に底勿，14世紀中頃の『島夷誌略』に古里地悶として記録されており，この時代から東部インドネシア海域世界の交易ネットワークの結節点の一つとして知られていたことがわかる。インドネシア側の史料では1365年に書かれた古ジャワ語の王統誌『デーシャワルナナ』（別名『ナーガラクルターガマ』）に「ティムール」として登場する。東ジャワのマジャパヒト王国の宮廷で作られたこの文献には，同王国と関係をもった地域が列挙されているが，その中にジャワの東方に位置する島々の一つとしてティモールが挙げられているのである。興味深いのは，ジャワ東方の島々の記述は，バリ島を起点とするグループと，スラウェシ島のマカッサルを起点とするグループに分かれており，「ティムール」は後者に属していることである。この時代のジャワ海以東の海域交易ネットワークはジャワ人が支配していたが，16世紀以降，ブギス＝マカッサル人が舞台の主役を取って替ったとされる。ティモールとマカッサルの密接な関係は現在も見られるが，14世紀のティムールが「マカッサル・グループ」に属していたことは，両者の関係が，ブギス＝マカッサル人が表舞台で活躍するよりもはるか以前に始まっていたことを示している。おそらく，交易の実質的な担い手も初期の段階からブギス＝マカッサル人であったのかもしれない。

ティモールの古名は「ティムール」だったが，これはマレー語の「東」を意味する。つまり，九州の国東（くにさき）と似たような発想で，もともと東方の島という意味だった。『デーシャワルナナ』でも島嶼部の地名の一番最後にティムールが挙げられているのは偶然ではない。インドネシアのマスコミは東ティモールの国名をTimor Timur，Timor Leste，Timor Lorosaeの三通りに表記しているが，Timor Timurはインドネシア語，Timor Lesteはポルトガル語，Timor Lorosaeは現地のテトゥン語の名称で，いずれも「東ティモール」という意味をもつ。このうちLorosaeは文字通りには「日の出」という意味だから，この国はまさに「日出づる国」である。いずれにせよ，東ティモールはインドネシアから見て東のさらに東という周辺的位置付けを歴史的に背負わされてきたと言えるだろう。

ところで，東ティモールが独立した日，5月20日が，インドネシアでは，オランダ植民地支配からの決別を告げる民族主義の目覚めを最初に体現した団体ブディ・ウトモの設立（1908年）を記念して「民族覚醒の日」と定められているのは，歴史の大いなる皮肉である。なぜなら，東ティモールの独立の過程は，インドネシアのそれと二重写しになるところがあるからだ。東ティモールは1975年にいったんポルトガルから独立を宣言したにもかかわらず，インドネシアの軍事介入を受けて，その27番めの州として併合されてしまった。インドネシアからの独立を目指す抵抗運動は根深く続いたが，けっして見通しの明るいものではなかった。それが急転直下実現したのは，ある意味では時の運であった。スハルト大統領退陣の後始末を押し付けられたハビビ大統領が，経済危機の中，簡単に言えば「お荷物」の切捨てを決断したからである。一方のインドネシアは，1945年8月17日に独立を宣言したものの，植民地を回復しようとするオランダの介入のために，5年

* Aoyama Toru, 鹿児島大学多島圏研究センター；Kagoshima University Research Center for the Pacific Islands（京都大学東南アジア研究センター客員部門教授）

近く独立をかけて戦うはめになった。オランダからの主権委譲が決まったのが1949年，現在のインドネシア共和国の形として発足したのは1950年8月15日のことであった。しかし，インドネシアにとって独立はあくまでも1945年に決まったことである。であればこそ毎年8月17日に独立記念日を祝うのだ。

興味深いことに，東ティモール憲法前文を読んでみると「東ティモールの独立は1975年11月28日に東ティモール独立革命戦線（FRETILIN）によって宣言され，2002年5月20日に国際的に認知された」と記されている。つまり，東ティモールがその憲法前文で主張していることは，まさにインドネシア自身がかつて主張した論理なのだ。我々は自らの意志で独立を願い，その達成を宣言したのになぜその理想を踏みにじり続けるのか。しかし，かつてオランダがインドネシアの願いに気付かなかったように，インドネシアもまた東ティモールの願いに気付かないままでおわった。東ティモールの独立を前にして，5月18日付けのイスラーム系民族主義全国紙『レプブリカ』に次のような記事がのっている。「25年間のあいだ，あやし続け，かわいがってきた兄弟が，最後には，あまりにも気安く，育てた母親のもとを離れて行くことに対して，心が傷つけられた」人々がいることは理解できるというのだ。「あやし続け，かわいがってきた」とくれば「赤ん坊」と言いたいところを「兄弟」としたところにまだ自制心が残るが，東ティモールを子ども扱いした言い方であることは否定のしようがない。実は，このような態度こそが，かつてオランダがインドネシアに対して示した態度であり，インドネシアの民族主義者たちが反発を感じた態度に他ならないのだが，インドネシアの中にはまだそこまで冷静に考える心のゆとりがない人たちが多いのだ。

このような反対派の批判を押し切って，メガワティ大統領は東ティモールの首都ディリで開かれた独立記念式典に参加した。反対派への配慮から大統領の滞在は数時間に過ぎなかったのだが，それでも帰国後のメガワティに対して式典参加への釈明を求める声が国会で湧き上がったのは反対勢力の大きさをよく表わしている。他方のグスマオ大統領の方もこの事情をよく理解しており，あらかじめジャカルタまでじきじきに出かけてメガワティを式典に招待したうえに，ディリにあるインドネシア戦没兵士へメガワティが墓参りするのにも同行するという気の配りようであった。そして，7月初めにはメガワティの参加に対する返礼としてグスマオはインドネシアを表敬訪問した。訪問は友好的な雰囲気のうちに終了し，今後の焦点となるさまざまな問題について継続的に討議していく道筋を作った。インドネシアと東ティモールの外交関係が良識のある態度で出発したことは評価してよいだろう。これは，東ティモールがASEANの正式メンバーとしての一歩を踏み出しことをも意味する。

しかしながら，一周遅れの国民国家として，あえて独立という誇りを選んだ東ティモールにも，海底ガス田の開発計画などを除けば，明確な将来の展望があるわけではない。世界の最貧国の一つという現実の壁が大きく立ちはかだっている。この点で，個人的に納得がいかないことは，東ティモールの指導者たちが地元のテトゥン語とならんでポルトガル語を公用語と定めたことである。それまでの公用語インドネシア語を排除し，現地語を公用語にするという言語政策は国民国家の定石として理解できるが，なぜポルトガル語にこだわる必要があるのか。ポルトガル語という選択には，むろん旧宗主国との関係が強い指導者層の都合もあれば，テトゥン語では近代化の推進役を担いきれないという実際的判断があることは確かだ。また，もともと東ティモールの住民はメラネシア系で，民族的にはむしろ東方のニューギニアの人々と近く，アジア諸国の潮流とは必ずしも同期していないところがあるようにも見える。しかし，独立が実現した現在，東南アジアとの結びつきは不可避であるし，東ティモールの独立を支援した南の隣国オーストラリアとの関係も考えれば，英語の重要性は揺るがない。さらに，西隣の（地続きでさえある）大国インドネシアとの関係，さらに，インドネシア時代に教育を受けた世代の多さを考えれば，インドネシア語を一夜にして追放することも不可能である。今後，人口80万人に過ぎない新興国家に四つの言語という状況は相当な負担になりつづけるような気がする。

東ティモールは，インドネシアへの併合から26年をして一時は夢かと思われた独立を勝ち取った。

インドネシアにとっては国民国家の幻想の一つの破綻であり，東ティモールにとっては国民国家の理想の実現である。スハルト政権の崩壊は，国民国家の理念と現実の綻びをまざまざと示してくれたが，東ティモールの誕生は，21 世紀にも国民国家がまだしぶとく生き残っていく可能性を暗示している。しかし，この世紀に生まれた国民国家にとって，日はようやく昇り始めたばかりのようである。

政党政治の実践とカンボジアの村社会

小　林　　知*

今年 2 月 3 日，カンボジアでは khum（クム）の執行部を選出する地方選挙が全国一斉に行われた。Khum とは，フランス保護領期の 1908 年に王令により創設された行政単位であり，現在のカンボジア地方行政組織の最末端を担う。日本語では，行政区などとされることが多い。

今回の khum 選挙は，カンボジアの地方社会へ政党政治という制度が初めて導入される機会として大きな関心を集めた。カンボジアでは，UNTAC 支援による 1993 年選挙以降，国政において政党政治が実現した。また州政府や郡政府においても，かつての親ヴェトナム社会主義政党の人民党，王党派フンシンペック党，急進改革派サムランシー党などの間で役職を分け合うようになった。しかし khum レベルにおいては，ポルポト政権の崩壊後 20 余年にわたり人民党が独占的に人事を支配してきた。

私はこの 4 月末まで，トンレサープ湖北東岸地域のコンポントム州コンポンスヴァーイ郡の「サンコー区」（Khum Sankor）においてフィールドワークを行っていた。外国人研究者として，調査許可申請の段階から紹介状を依頼したプノンペン大学や州政府に，自分の調査範囲は政治の領域に及ばないと説明してきた手前，私はこの khum 選挙に正面から関心を示すことは控えた。しかし投票日へ向け，それまで 1 年あまりの住み込みで親しんだ村社会に一種の興奮が高まってゆく様は興味深く，いわばその動きを横目で観察することとなった。

Khum Sankor では，まず 2001 年 9 月半ばに選挙準備委員の募集があった。応募者の大半は男女の学校教師である。その後 11 月 17 日，khum 中心部に位置する仏教寺院サンコー（Vat Sankor）にて政党別候補者公示の順番を決める抽選が，人民党，フンシンペック党，サムランシー党の各党候補者立ち会いのもとで行われた。11 月 19 日～ 12 月 1 日，国道 6 号線沿いの市場の横に各党 23 ～ 24 名の候補者の顔写真と名前が張り出された。1 月 7 日，人民党は 1979 年の解放を祝う恒例の式典を，非党員の女性など例年より多くの住民に声をかけて開催した。1 月 18 日，投票日直前 2 週間に設定された選挙運動期間が始まり，立候補する旧執行部の 4 名は辞任，khum 行政の権限は他の者（人民党員，30 歳代男性）に委譲された。選挙運動は，khum 内の行政村を各党に 1 日 1 村ずつ割り振り，他党と鉢合わせしないよう配慮して行われた。

選挙運動を総括してみれば，ただ人民党の周到さばかりが目立ったように思う。実は人民党は立候補者公示のはるか前の 9 月に，各村ごと「探りの選挙」というものを行った。党員である村長を介して村人を集め，党の立候補予定者のリストを渡して最も好ましいと思う人物 5 名に印をつけてもらうというもので，早くいえば人気投票である。この模擬選挙により，人民党は格式に囚われず候補者の序列を決めることができた。例えば Khum Sankor では，様々な法的手続きにかこつけて私財を肥やしていると住民の声があった従来の khum 長と治安警察分野担

* Kobayashi Satoru，京都大学大学院人間・環境学研究科；Graduate School of Human and Environment Studies, Kyoto University
㈶松下国際財団より助成を受け，今年 4 月末までカンボジアにて現地調査を実施。

当の助役氏が大きく順位を下げ，ユニセフの母子健康管理プログラムなどで村々を隅々まで歩いていた農業開発分野担当の助役氏が首位についた。とにかく，各村で支持者の名前集めを行ったり酒宴をもうけたりと組織力を生かした直接的な活動を行う一方，時期を合わせて，登場人物は仮名ながらもフンセン首相の闘争の半世紀をドラマ化したラジオ劇が再放送されるなど，人民党には選挙へ向けた間接的な面での工夫もみられた。

Khum Sankor の場合，フンシンペック党からはクメール語でアチャー（achar：阿闍梨，字義的には「師」の意味）と呼ばれる仏教寺院の俗人指導者が立候補者リストの首位を占めた。教義上，仏界と俗界との分離を明言する上座仏教社会にあって，在家者とはいえ指導的立場の者の立候補を，個人的には大変注目した。仏教の精神は中道にあるとして，任意の一政党に荷担することを疑問視する声が特に老齢の戒律把持者の一部にあったが，仏教の精神に基づいた清廉な khum 行政は好ましいものだという意見も聞かれた。活動としては，事前に「塩・味の素・洗剤」の小袋を希望者に配った他，選挙運動期間には選挙の意義，投票用紙の秘密性，正義の重要性などを強調した簡単な演説を，アチャー氏が集められた村人の前で行った。会場の横断幕にはシハヌーク国王・モニレット王妃の顔写真が掛けられたものの，王室への礼賛も他党への攻撃や中傷も共にみられなかった。

サムランシー党の首位の立候補者は，歯に衣を着せぬ物言いで知られた元小学校校長であった。サムランシー党の党員は，自分たちには資金がないという自嘲的な苦笑とともに，資金さえあればという自信もおおっぴらに口にしていた。だが時に，党のシンパの一部からは現実的な具体的戦略のないうぬぼれ屋の集まりだとの自己批判も耳にした。選挙運動の初日，彼らはまず khum 中心部の市場周辺で演説を行ったが，フンセン首相への個人攻撃に力が入り，それを人民党から選挙準備委員会に訴えられてしまった。その後，各村落の訪問では党首サムランシーの肉声テープをスピーカーから流すだけで，地元の立候補者がマイクを握ることは少なかった。「問題を起こさないために」というのが，心なしか仏頂面の元校長氏の説明だった。

Khum Sankor 新 khum 評議会の面々

2月3日は夕方に各投票場にて開票作業が行われ，Khum Sankor では人民党の勝利が明らかになった。投票用紙は翌日には州政府へ送られたが，全国的な選挙結果の確定は1カ月以上後のことだった。結局，人民党が全国1,621選挙区のうち1,597区にて最高投票数を獲得して圧勝し，次点はサムランシー党であった。Khum Sankor では新たに組織された khum 評議会11名の椅子を人民党6席，フンシンペック党3席，サムランシー党2席と分け合い，最大得票数を得た人民党から khum 長，フンシンペック党からは助役第一位，サムランシー党からは助役第二位がそれぞれ選出された。

帰国が近づいた3月27日，khum 評議会の初会合が開かれ，新しい門出をぜひ記念写真にとってくれと頼まれた私も顔を出した。別の場所では，人民党の代表からは多党状態へのとまどいを，フンシンペック党とサムランシー党からはもう人民党の好きなようにはさせないという意気込みをきいた。政党政治という制度は実現された。あとは実践である。果たして今後，選挙運動において激しく相争った者同士が，地元住民の生活と地域社会の発展のため話し合いによって意見を調整しながらどのような成果を形にしてゆくことができるのか，注視してゆきたいと思う。

今回の選挙期間中，村人からは「日本にもケナパッ・プチャンはあるのか」という質問を度々受けた。クメール語でケナパッ（kenapak）とは「党」，プチャン（phchanh）とは「負かそうとする」という意味で，野党と訳してよいと思う。そして，私が野党は日本の方がカンボジアよりずっと多いよと答

えると，彼らは皆一様に意外そうな顔をみせた。その時，はじめ私はその村人達の意外そうな顔のほうが意外であったのだが，すぐに，彼らと私の生きてきた社会とその歴史に改めて思い至らされた。それは，フィールドワークが長期化するにつれ，時に意識しづらくなっていたカンボジアの村社会と私の間の距離が，久々に明白なかたちで立ち現れた瞬間であった。

図書館の扉の向こう

―― タイの大学図書館活動から学ぶこと ――

北　村　由　美*

今年の2月末から3月にかけて，タイで図書館や書店を訪れる機会があった。バンコク市内の著名な大学図書館，専門図書館，書店を皮切りに，チェンマイとコンケンの大学図書館や街の書店を訪ねたあと，東北タイのマハサラカム県にある，マハサラカム大学図書館へ向かった。当初私は，バンコク市内の予算的に恵まれた有名国立大学図書館から多く学ぶことを期待しており，地方では，将来に向けてネットワーク作りができればよいと気楽に考えていた。しかし実際には，地方の大学図書館の方が学ぶことが多く，司書職についての個人的疑問を解決する糸口になる発見をすることができた。以下は，私が最も感銘をうけたマハサラカム大学図書館の活動を事例とした，タイの大学図書館と司書の活動についての見聞録である。

マハサラカム大学は1968年に設立された教育専門学校分校を前身とし，1973年にシーナカリンウィロット大学分校となった後1994年に独立した新設校である。図書館は未だ建築中の新キャンパスに昨年移ったところだ。この図書館に元センター客員のソンポン氏と，同じく元客員で現館長のスーチン氏がいる。マハサラカム大学図書館に到着して初めに感じたのは，館内に溢れる活気である。中堅以上の幾人かはアメリカで図書館情報学博士号を取得し，図書館運営と図書館情報学の大学院教育の双方に関わっている。若手スタッフにも働きながら複数の修士号取得や，海外派遣等の勉強の機会が与えられ，学んだことを実務に応用し新しいプロジェクトとして，館長に提案し遂行する力試しの場が与えられている。このような配慮には，若い組織ならではの意気込みもあるのだろうが，バンコクの大きい大学図書館では感じられなかった活気を生み出す根拠となっているのではないだろうか。

さて，ここの蔵書で特筆すべきは，図書館1階にある，東北タイ情報センターだ。コレクションを形成している蔵書内容はもちろんのこと，書架のデザインも独特で，東北タイの日常生活を伝える農具や家，民芸品等の形をしており，ユニークでかわいらしく，メッセージ性に溢れている。このセンターの創設に深く関わった前図書館長によると，センターは東北タイの人達が，独自の文化を誇りに思えるように，東北タイ文化に関わる情報を集積し発信することを目的として創設されたそうである。書架の独創的なデザインは，地元の人を含めた多くの一般の利用者が，一目で東北タイ文化と分かるよう考えた工夫であり，書架の一つ一つまで創作家と相談してデザインしたという。このような情報センター内に足を踏み入れると，まるでセンター全体が語りかけてくるような印象をうける。博物館のように，展示スペースを設けている図書館はよく見かけるが，展示と書架が一体となって語りかけるようなものはこれまで見たことがなく新鮮であった。図書館が扱う本というメディアは，開かないことには多くを語ってはくれない，しかしこのセンターの試みは，私達が本を開くまえに，視覚，触覚，嗅覚といった人間

* Kitamura Yumi，京都大学東南アジア研究センター；Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

の五感に訴えて情報を伝達してくれている。図書館自体もさることながら，図書館外の活動には，より胸を打たれるものがあった。同図書館には地域コミュニティへの教育的貢献を専門に行うアウトリーチ活動部門があり，大学院生と図書館スタッフが共同でこの部門の活動を展開している。その中で私が最も興味を持ったのは，村落部での識字に関する活動である。日本でも馴染み深い，移動図書館や紙芝居等の基本的なアウトリーチ活動ももちろんのこと実践されている。その他に，織の肩掛鞄に，村の生活に役立ちそうな実用本『鶏の育て方』等を入れて鞄ごと貸し出し，村の人が農作業にも本を持って行けるよう心配りした読書推進活動なども展開している。また，気候が良いからこそ可能なのだと思うが，手作りの布製の本入れ（タペストリーにポケットがついたようなもの）に各種の本を入れて村の木々に掛けて置き，自由に貸し出しをする文庫活動などを行っている。いずれも，人々が日常生活の中で本に親しめるように，どこにでも気軽に本を持っていけるように，という工夫がされている。

識字率の向上や安定を図る活動は，アメリカや日本では公共図書館や学校図書館の役割だと考えられている。しかし，タイでは大学図書館が，識字に関する予備調査を行った上で識字プログラムを考案し，その一環として様々な読書活動を展開するという終始一貫した対応を行っているようだ。大学図書館が中心となり，地域の学校や公共機関の後押しをする背景には，特に地方での識字教育の不安定さがある。また，高度な知識と経験を有する大学図書館員の能力への信頼があるといえる。スーチン館長によると，タイ東北地方では人口の85%が農村に住んでおり近くに公共図書館がないという。一方でカンボジア系，中国系，ベトナム系をはじめとするマイノリティが多く，識字教育は必須と考えられている。同館長は，大学図書館司書は，単なる個人のキャリア以上に社会的義務の一端を担う責任があると考えている。識字教育にはもちろんタイ語で読めればいいというのではなく，少数民族への言語政策など，より政治的で深刻な問題も絡みあっている。しかし，少なくとも図書館の存在意義を根底から見つめた上での活動だといえる。

このように地域へ貢献する活動を展開する同大学図書館では，実はより広い視野に立った，国境を超えた司書教育も展開している。タイと隣接するラオスやカンボジアでは，司書教育課程がタイに比べて確立されていないため，図書館の整備運用を行う司書の育成がままならない状態である。そこで，タイの大きな大学図書館は隣国の司書養成，それに司書教育を行う教官のトレーニングに力を貸している。マハサラカム大学図書館でも特にラオスやカンボジアの大学図書館との交流に力をいれている。具体的には司書教育教官候補をタイ側の費用で数カ月招聘し研修を行ったり，逆にタイ側の図書館関係者を派遣して現地で講習を行ったりしているようだ。

マハサラカム大学図書館はこの他にももちろん，学位論文デジタル化プロジェクトなど，いわゆる最近の図書館の傾向を存分にとりいれたプロジェクトも多数実施している。しかし，一方で大学図書館が組織的に地域の問題に取り組み，司書が試行錯誤を繰り返しつつも，社会教育を担っていく姿が見られる。それは，大学図書館の枠組みに囚われず，その地域での図書館の存在意義を見据えた姿だといえる。

私は，司書の仕事には大学図書館，公共図書館，学校図書館等の館種別に関わらず，2本の柱があると考えている。知の体系の創造と，知の普及への貢献である。前者は，分類体系を作り出し，それによって集積された知識を，図書館という場で視覚的に再構成することである。この分類体系の創造，及び分類に基づいた目録作成に関しては，レベルの差こそあれ，日本の多くの図書館で，ある程度確立されているといえる。しかし，後者の知の普及への貢献を実践している図書館は非常に少ないのではないだろうか。知の普及とは，利用者に対して知識と情報へのアクセスを提供するだけでなく，利用者がそれらを活用するだけの能力があって初めて可能になる。情報の利用に関してはもちろん日本の図書館でも，「情報活用能力の育成」と銘打ってオンライン検索などの利用者教育を行ってはいる。しかし，それらはあくまでも知識と情報にたどり着くためのツールの使い方を教育するのであって，知そのものへの理解を深める教育活動だとはいえない。マハサラカム大学で見聞した活動から，知の普及のために日本の大学図書館で何ができるのかを考えた。そこで思

い当たったのが，最近の学生の読書への興味の低さをどうにかして高めることができないかということである。世界32カ国の15歳児（日本では高校1年生）を対象としたPISA（Programme for International Student Assessment: OECD生徒の学習到達度調査）2000年調査結果概要によると，日本の生徒は，読解力テストの各項目でいずれも上位10位以内に入っているにもかかわらず，「毎日趣味として読書をしているか」という質問に対し，55%の生徒が趣味で読書をしないと回答しており，OECD平均の32%よりも多く，参加国の中で最も高い割合を示している。これは，生徒が試験には答えられる訓練は受けてきているが，知識そのものを渇望してはいないことの現われだといえるのではないだろうか。この現象に対して，日本の司書は今，館種を超えて共同で取り組むべきではないのだろうか。具体的に何をすれば良いのか，今の私にはまだ分かっていない。私自身は知識そのものを渇望しているし，そうした飢えを満たす役割が図書館に十分存在すると考えている。それをどのように伝えるか，それが司書の役割であり，手を拱いて館内でじっと利用者を待っているわけにはいかない。とりあえず，図書館の扉から一歩足を踏み出す必要があると感じている。